

タツマキの弟子は頂点
に行きたい

さよならフレンズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とあるC級ヒーローがひよんなことがきっかけでタツマキの弟子になり、S級を超えてヒーローの頂点を目指すお話。

要は超能力者たちを主軸にした再構成ものです。

少しタイトルを変更しました。

目次

僕と師匠	1
師匠とワクチンマン	10
師匠とアマイマスク	19
僕と『最強』	26
僕とサイタマ	33
僕と蚊とZ市と	40
僕とZ市の危機とぷりぷりプリズナー	47
僕と『狂っている』ということ	53
僕とアマイマスクと新たな任務	61
僕と現状整理とジエノス	68
僕と忍天党の忍者たち	75

僕とジエノスと決意	83
僕と高速戦闘と決着	91

僕と師匠

僕はこの世に生まれ、生後僅かでハイハイをしていた時から、自分の肉体に世界とは違う違和感というものを感じ続けていた。

手足が欠損していたとか、生まれつき病気だったとか、そんな訳じゃなかったけれど。言語化するのならば、きつと違和感と表現するのは正確じゃない。『異物感』という方が正しいだろうか。

とにかく宇宙人の群れの中で、僕一人だけが地球人のような妙な感覚がずっと続いていったんだ。

だけど次第に分かってきたんだ。

人間の集団生活の中で僕が他の人の存在を全員おかしいって感じてしまったってことは。

他の人は全く異常なんかじゃない。僕一人だけがおかしいってことなんだって。

僕はそれなりに裕福な家の生まれだ。

お父さん、お母さんは2人とも優しかったし、幼稚園や小学生低学年のころは普通の人間のふりをすることはできていた。

だけど、僕の中の『異物感』はぜんぜんなくならない。

たまに僕を担当する先生から、首をかしげられながらこう口にされることがあった。

「きみはいつも涙を流さないんだね？」

そう。僕は先生に叱られても泣かなかった。そのころには自分の中に巣食う異物感はずつと強まっていたんだ。

だから涙を出すほど激情をあらわにしてしまつたら、それを抑えられる気がしなかつた。

僕は強く喜ばなかつた、僕は強く怒らなかつた。僕は強く悲しまなかつた。

だけど僕の中の異物感は容器に流れ込む水のように、どんどんと溜まっていった。

水道の蛇口はなにをしても止まることはなかつたし、とめようとすればするほど僕という容器にどんどんと流れ込んでいった。

後から考えれば、精神の動きが思春期に近づいていったからなんだろうと分かるけれど。

とにかく、その容器は僕が小学4年生のころに破裂したんだ。

きつかけは小さなことだった。給食に配給されていた牛乳瓶が割れたんだ。

その瞬間、僕は驚いて感情を制御することができなくて。

パン。と破裂して。臨界点を簡単に超えてしまった。

あの時の恐怖に引きつる大人の顔、固まった学友の顔、阿鼻叫喚の地獄絵図はいまでも僕の脳裏に焼きついて離れない。

今でも悪夢を見たりするからね。

「怪人だ！怪人がいるぞ！」

すぐさま僕から生徒を庇うように制止させ、僕を睨み付けてくる男の先生。

「怪人がいるよ！助けてママ！」

ひつくひつくと頬をあげて、いもしない両親に助けを求めボロボロと大粒の涙を流して泣きだす女の子。

「子供たちを守らなきゃ！今すぐ警察に連絡するのよ！」

真つ青に震えながらも、僕という異物に対抗するために動き出す女の先生。

僕が割れた牛乳瓶のガラスを手を使わずに宙に浮かせてから、その場にいた人達は皆僕に恐怖を覚えていた。

誰も今まで異能を隠そうとしていた僕の努力を認めてくれなかった。

仲良くしていた友達も、僕を教えてくれた先生もそれは変わらない。

僕を凝視する全ての人達から感じる空気は『拒絶』そののみだった。

「みんな、どうして……！」

僕の胸中には、ドス黒い怒りが巻き起こっていた。

どうして僕が怪人と一緒にされないといけないんだ。

どうして『超能力を使える』というだけでそこまで恐れられないといけないんだ。

「どうして誰も、僕を分かってくれないんだよ！」

いつの間にやら、僕も大粒の涙を流していた。感情をコントロールする気はとうに失せていた。僕の嗚咽は子供たちの悲鳴とコーラスのように重なる。それは歪な重奏のようにも思えた。僕は子供でしかなかったのに、先生たちは僕の一挙手一投足に警戒しビクリと体を震わせ警戒を強めるだけだった。

その後は小学校中に鳴り響くサイレンの音と共にやってきた怖い警察の大人たちも、泣きじやくる僕に容赦するつもりは全くなかった。

「あの子がガラスのカケラを妙な力で持ち上げた怪人です！」

通報をした女の先生が僕を指差して化け物だと金切り声をあげる。

警察はがっしりとした体格の人ばかりで、小学生の僕が抵抗することができるはずもない。

それでも僕は必死に怖い大人たちから逃げようと叫びながら何も無い空中に手を伸ばした。

「放せ、放せよ！」

大人たちが怖かった。皆の恐怖の視線が怖かった。

そしてこれ以上この場にいることそのものが、とても怖かった。

「おとなしくしろ！」

頭を強く大人に殴られ、僕の意識は遠のいていく。

警察に連れられて消えていくまで、僕に向けられた悪意は消えることはなかったんだ。

その時僕は、薄れゆく意識の中でこの世を恨みながらある簡単な摂理に気付けたんだ。

ヒーローなんてこの世にいない。自分の身は自分で守るしかないんだって。

それから数年後、僕が解放された後のある日のこと。

「落とし物を届けてくれてありがとうね」

「これはダウジングの力です！これもヒーローのワークなので大丈夫ですよ！」

愛嬌のあるおばあちゃんが感謝の言葉と共に笑みを浮かべ微笑んでくれたから、僕は安心させるように親指をグツと立てた。

僕たちC級ヒーローは、基本的に出現する怪人との戦いより足を使つての人助けのほうが多い。

非力な僕たちは、怪人相手への戦力という意味ではあまり期待されていないんだ。

今の僕には強くならなければならぬ深い理由があるけれど、今は地道に人助けをするのが主な仕事かな。

おばあちゃんは口角をあげ、勢いよく僕の背中をバシって叩いてくる。

ち、力が強い。非力な僕はあやうくつんのめって地面に倒れそうになった。

「あんたたちヒーローにはいつも感謝してるんだよ。なんだって悪い怪人を倒してくれ
るんだからね」

怪人だと恐れられ悪意を向けられていた昔を少しだけ思い出す。

ずきん、とヘッドギアをつけている頭の傷が痛んだ気がした。

けれど僕は、安心させるためにおばあちゃんを元気づけるんだ。

「毎回アンジャラスブリッツを渡っていますよ、これからも市内の安全を守りますよー」
自己紹介が遅れたね。僕の今の名前はギアスパー。

序列はC級で現在211位。意地が悪いヒーローからは『インチキ超能力者』『金魚の糞』『大口叩き』って陰口を言われたりもするけれど今の僕は、実はあんまり気にしてないんだ。

さつきもちよつとだけ言ったけど、今の僕には大きな目標があるからね。

「僕はギアスパーというネームです。いずれ力をつけてヒーローS級に上がる男なので、よろしくお願いします！」

「よく言った、男なら常にそれぐらいの意気込みを持つておきな！」

今度は僕が目を丸くする番だった。僕は隠さずに皆にこの意気込みを伝えているけれども、反応は大抵2つしかない。笑い飛ばされて馬鹿にされるか、呆れるように溜息をつかれるかだ。このおばあさんのように大真面目に受け取ってもらえたのは久しぶりだ。

たとえ単なる社交辞令でしかなかったとしてもおばあちゃんの明るさが、温かさが僕はととても嬉しかったんだ。

「ギアスパー、名前は覚えておくよ。あんたの夢を応援してるから偉大な男になってみせな！」

「ありがとうございます！」

大きく頭を下げて、優しいおばあちゃんと別れた僕は師匠の元に向かう。

最初はゆっくり歩きながら、途中から時計を確認して小走りに。

どうやらおばあちゃんと話が弾みすぎてしまったらしい。これはヒーローとしてどころではなく社会人として失格だ。急がなければまずいね！

「遅刻したら師匠がアングリーになりますからね。これはハイスピードで向かう必要がありそうです！」

僕が待ち合わせ場所に到着したのは、待ち合わせ5分前。

砂利が地面に敷き詰められている、雑草が所々にはえた人気の少ない空き地で僕と師匠は顔を合わせていた。

僕は「ぜいぜいと息を吐きながら、師匠を『見下ろす』」。

「タイムがギリギリですがセーフですか!？」

「遅かったじゃない。ギリギリ弟子のままであることを許してあげる」

「サンキューです、感謝しますよ——」

僕の師匠は『超能力で』ゆつくりと浮遊して、僕の目の高さまで浮遊し不敵な笑みを浮かべた。きっと僕に見下ろされたのが気に食わなかったんだろう。

師匠らしいなと内心で思いながらも、僕はそれを表情に出さない。

なんてたって、師匠に下手なことを言っちゃえば殺される危険性があるからね!

師匠の期限を損ねるのはクレイジーだ。

「——タツマキ御大」

「ありがたく思う事ね」

名前を呼ばれた師匠は、偉そうに腰の前で腕を組んでみせた。

「じゃあ、今日も時間がないからちやっちやとアンタの超能力を鍛えるわよ」

「厳しくお願いします!」

これは世界でも数少ない超能力者であるC級の僕、ギアスパート。

もう一人の超能力者の現在S級2位である、タツマキ師匠の物語。

ワンパンチで怪人を倒す英雄録からはほど遠いけれど、これも立派なヒーローのお話だ。

師匠とワクチンマン

お互いの都合があう僅かな時間をみつけて、タツマキ師匠に見て貰いながら今日も僕は超能力の訓練をしていた。

午前10時の小腹がすいてくるあたりの時間帯、今日は絶好の快晴だ。

訓練といってもタツマキ師匠が、軽く地面から数センチ程度に小石を数個巻き上げ、浮かせるように超能力を使ってるからそれを真似するだけなんだけどね。

でもこれが難しく、今はなかなかうまくできないんだ。

「これはフェイルですね」

「また不発？力みすぎ。小さな物質ぐらい手足を動かすように自然に動かせるようになりなさい」

特訓をしていて分かっていたことだけど、タツマキ師匠はいわゆる天才肌の超能力者だ。

僕の超能力の調子が良い時でさえできないことを、タツマキ師匠は軽々とやってみせる。

それに比べて僕は細かい超能力の制御がうまくいっていない。

そもそも発動が不安定という点も大問題だったりする。こればかりはひたすら特訓を積み重ねるしかない。

「僕はちゃんと成長できているでしょうか」

僕は失敗を重ねながら、恐る恐る不機嫌そうな師匠に問いかけてみることにした。

師匠の気は短い。僕のようなC級ヒーローのために時間を割いてくれていること自体が奇跡みたいなものだと僕は思ってる。

師匠は僕の問いかけを鼻で笑って厳しく一刀両断した。

「最初よりはアリ分ぐらいいはマシになってるんじゃない？ 超超雑魚が超雑魚になっただぐらいね。アタシにはあんまり違いが分からないから気のせいかもしれないけど」

「手厳しいお言葉ですね」

「いっておくけど、アタシが完全に時間の無駄だと思った瞬間この訓練は終わりになるってのは忘れないことね」

師匠は仏頂面のまま続けろと促してくる。

少なくとも師匠はこの超能力の特訓になんらかの意味を見出してくれているみたいだ。

それが僕の成長によるものなのか、その他の意味があるのかは分からないけれど。

僕は俄然やる気が湧いてきた。

「イメージを発現してみますー！」

僕のヘッドギアがスパークすると同時に、土管に座って暇そうに欠伸をしていた師匠は真剣な表情になりすつと立ち上がった。どうしたんだろう？

「今日は無駄みたいだから帰るわ。細かい力の制御の特訓は続けなさい。後片付けは任せたわよ」

「え……しまった、パワーが制御できない！」

師匠は空を飛んで去ってしまったけれど、僕の方は超能力の奔流が止まらない。

慌てて抑え込もうとしても無理だったので、やむなく力を手から放出することしかできなかつた。

「あ、あ……！」

僕の顔色は誰から見ても分かるぐらいに真っ青だっただろう。

先程まで師匠が座っていた3段階みあげられた6個の土管は轟音と共に空中でぶつかり合い、砕けて細かくなっていき、細かくなった欠片は他の欠片との摩擦でさらに細かくなる。嵐のような超能力の奔流の中で土管は最終的にコンクリートの粒のようになってしまった。

幸い周りに誰も居ない場所で訓練をしているから怪我人は出なかつたけれど、空地は大惨事だ。またヒーロー協会に叱られてしまいそうだ。

「うーむブロークンしてしまいました。弁償しないといけませんね」

僕は力なく肩を落としながら、師匠の言いつけ通り荒れ果てた空地を掃除することにしました。

止めに僕の頭の上に鴉が糞をしていったことを付け加えておく。

丁度ご飯前だというのに……。

「とてもアンハツピーな訓練でした。そういえば師匠が慌てて飛び出していったことが気にかかりますね。僕の暴走の前にはもう浮遊していました」

その疑問点は、翌日のニュースで明らかになることとなる。

師匠はそのころ、僕の知らないところで地球の脅威と戦っていたんだ。

アタシ、タツマキは表情を険しくさせて空を鳥のように飛びながらA市に向かっていったわ。

凄まじい規模のエネルギーがA市で発生したり消えたりしているから、絶対になにかあるとは思っていたの。

案の定携帯電話がなったわ。ヒーロー協会からの応援要請で間違いないでしょう。

アタシは風をバリアーで防ぎながら携帯電話を取ったの。

当然よね、風がうるさいと向こう側が、何を言っているか聞き取りづらいじゃない？

まあこっちは向こうからの声が聞こえれば返事だけで十分でしょうけれど。

とにかくアタシは万全の体制で通話開始のボタンを押したわ。

「A級が壊滅状態だ！戦慄のタツマキに原因の怪人退治を要請する！災害レベル竜！」

「もう向かつてるわ！切るわよ！」

ピ、という音が鳴る。アタシは必要最低限の通話で会話を打ち切って、空を飛ぶ速度を上げることにしたの。

感じるエネルギーの密度から、とても放っておく訳にはいかなかったからね。

「早く怪人を倒さないと被害が拡大するわ」

アタシがA市に着いた時には、もう地獄絵図になっていたわ。

市内の大半の建物は消滅。コンクリートの地面まで抉れていて怪人の脅威を物語っていたわね。

火災があちこちで巻き起こって、人々の苦しむ声が呪詛のように聞こえてきたわ。

悲惨極まりない光景に、アタシは怪人への警戒レベルをさらに引き上げたわ。

こんなことをした元凶はなんとしてでも倒さないと人類滅亡の危機だと感じたからよ。

「酷い有様ね、怪人はどこかしら」

その時、飛んでいるアタシに向かつて巨大な光の球が飛んできたからアタシは力を込

めて片手をかざしたわ。楽に壊せると思ってはいなかったけれど、想像以上の破壊力だった。

なんとか強引に超能力で消滅させたけれどアタシの超能力が少しでもおされるなんて思わなかったもの。

「アంతは何者かしら?!」

アタシは人型で頭に触手が2本生えている姿をした怪人に問いかけたわ。

怪人に名前を問いかけるなんて思ってたけれど、相手が強力だったから情報が欲しかったのよね。

案の定怪人は憤怒の表情を隠そうともせずアタシに詰め寄ってきたわ。

怪人も空を飛ぶ速度が速くて、アタシは冷や汗をかかずにいられたかったの。

「私は人間共が環境汚染を繰り返すことによって生まれたワクチンマンだ!」

「へえ、地球の掃除屋でも気取っているわけ?人間様に逆らってるんじゃないわよ」

「いいや人間共を駆逐することが我が指名。お前を含めた人間共は必ず滅ぼす!」

メキメキ、ボキボキという音と共にワクチンマンと名乗った怪人の体が2倍、3倍と肥大していくのが分かったわ。変化したワクチンマンの姿は正に怪人。神話で言うのならバビロニアに似ているかしら。少なくとも身体能力が上昇していく過程ははっきり分かったわ。

「生憎怪人の強化を待っているほどアタシの行儀はよくないのよー」

怒っているのはアタシも一緒。アタシがA市の周囲に倒れていた、無人になったビルを持ち上げてワクチンマンにぶつけたけれど、ワクチンマンにはきいていないみたいでワクチンマンは不敵な笑みを浮かべるだけだったわ。白兵戦も強く、光る球の遠距離攻撃も強力。

「今まで見た怪人の中で一番強敵ねー」

アタシは息を飲んで激闘の覚悟を決めたのだけど……。

「ほい」

その瞬間にハゲ頭の、マントを着けた不審者が横から現れて一撃で怪人を粉碎していったわ。

「……は？」

アタシは口をぽかんとあけていたわ。

人間って本当に驚いたら何も考えられなくなるって本当みたいね。

アタシとワクチンマンが本格的に交戦する前にその男は現れたんだけど、ワクチンマンが強力な怪人なのはどう考えても明白だったわ。

それこそアタシ以外のS級ヒーローじゃ勝ち目がないってはっきり分かるぐらいの怪人よ。

それがワンパンチで一撃つてどう考えても普通じゃないじゃない！

「大丈夫みてーだな」

ハゲ頭の不審者は飛んでいる私を一瞥した後、すぐに消えて姿が見えなくなったわ。怪人じゃなかったみたいだけれど、一体なものなのかしら……。

恰好はヒーローだったから、独自に正義活動をしているのかもしれないけれど。

(これは調べる必要があるわ。ヒーロー協会に報告ね)

アタシはこの世の中で生きるためには強力な力を持たなければいけないと常日頃から感じているわ。あのハゲ頭は当然アタシよりは弱いだらうけれど、十分な力を持っている。

アタシが少しだけ興味を惹かれる理由は十分だったといえるでしょう。

(アタシが時間を使ってあげているギアスパーはどうなるでしょうね。どれだけ成長できるかしら)

本人の前では言わないけれどあのC級の潜在能力は高いわ。瞬間火力だけならアタシの妹を凌ぐかもしれない。うまくいけば災害レベル鬼上位とも互角以上に戦えるでしょう。その分細かな制御は苦手みたいだし、そもそも超能力が発動しないことはあるけれど。とにかく超能力者のヒーローはほぼ居ないから、アタシが面倒を見ることになったのはある程度仕方がないと思ってる。妹に押し付ける気にもならなかったし。

(なぜか放っておけないと感じるのは、どうしてなのか分からないけれど)

ギアスパーは可愛い顔立ちをしているという訳じゃないわ。そもそもヘッドギアで顔隠れてて見えてないし。

同じエスパーだからということでもないでしょうし、本当ならアタシがあんな雑魚に構っている時間はないはずなんだけど。

(少しだけ不思議ね)

アタシは壊滅したA市住民の救助活動を優先して行いながら、ほんの少しだけ頭の片隅でそんなことを考え続けていたわ。

師匠とアマイマスク

「S級2位のタツマキが僕に会談を申し込んでくるなんてね。どういう用事なのかな？」

「アンタがヒーロー昇級に関わっているのを知らないと思ってるのかしら？」

アタシ、タツマキはA級1位のアマイマスクと画面越しに話をしていたわ。

女をたらし込むどこか胡散臭い奴だけれど、今はこの男に直接聞くのが手っ取り早い。

アマイマスクがもし、あのハゲについての情報を知らないんだったら正体がC級以下もしくは独自でヒーロー活動をしている者というふうに絞られるからよ。

C級以下ならある程度有名になっているでしょうから、独自でヒーロー活動をしているという見方を強めていこうと感じているわ。その場合でもヒーロー協会においてある程度の権力を持っているアマイマスクはなんらかの役にはたつでしょう。

ただアマイマスクは、アタシの話を聞いて溜息をつき、どこか残念そうな表情を浮かべていたわ。それから生意気にも子供に話しかけるように窘めてきたの！

「戦慄のタツマキ、キミがギアスパーという弟子のエスパーを気にしていることはよ

く知っている。彼をB級に昇格させて欲しいんだろう?」

「……は?」

顔に血が上っていくのが自分でハッキリ分かったわ。正直なにを勘違いしているの、としか思わなかったわね。でもアマイマスクはアタシが反論する間もなく呆れたように、さらにアタシの怒りを煽ってきたわ。

「僕からはつきりいわせてもらおうが満足に力を使えないヒーローをB級にするつもりはない」

「あの超能力の強力は一部ではS級ヒーローを凌いでいるが、ヒーローはいつでも怪人を倒せるようにしておく必要が……」

勘違いで呆れられていてアタシはもう我慢の限界だったわ。怒りで超能力が暴発した時みたいに頭から血が噴き出しそうだった。

アタシは机を大きく叩いて苛立ちを隠そうともしなかったわ。

机は軽くへこんでいたけれど、この弁償代もアマイマスクに払ってもらおうとしましよ
う!

流石にアマイマスクもアタシの怒りに気付いて黙ったみたいね。すこしは気分が晴れたわ。

「アタシがいつそんな雑魚のことを昇級してくれてアンタに頼んだかしら?」

「……これはとんでもない誤解をしてしまったかな、悪かったね」

「分かって頂いて、とても嬉しいわ。もう少しその甘い顔に脳みそを詰め込んでおきなさい」

「なんだと?」

いつの間にかアタシとアマイマスクはピリピリした剣呑な雰囲気になっていたけれど、いつものことね。今回は明確に相手のほうが悪いことだし。

アタシは気にせずに本題に入ることにしたわ。

「アタシがこの前退治したことになるって怪人のことだけれど」

「A市を壊滅させた怪人名ワクチンマンの件だったのか。それで?」

「あの怪人は相対した時、今までの災害レベル竜の怪人の中で一番強力だと感じたわ」

「竜の中でも脅威はトツプクラス中のトツプクラス。もちろんアンタじゃ倒せないレベルね」

「……」

アマイマスクが災害レベル竜を単独討伐したことがないということは調べてあるのよ。

黙り込むアマイマスクを小バカにしたアタシはいい気味だと思ったわ。

「そのワクチンマンを倒したのはアタシじゃないわ。世間一般ではあたしってことに

なっているけれどそれは勘違い。白いマントに黄色いヒーロースーツのようなものを着ているハゲの男よ」

「なるほど、そのヒーローを探してほしいという依頼という訳だ」

「アンタに覚えがないのなら独自にヒーロー活動をしているのかもしれないわね。アタシの見立てでは、その男の実力は最低でもS級上位レベルはあるはずよ。なんせ拳の一撃で倒したのだから」

アマイマスクはようやくアタシが会談を望んだ理由が理解できたのか、軽く得心したように頷いていたわ。興味を示してくれたみたい。この男とアタシの考え方は、ある程度近いものがあるのよね。

「災害レベル竜以上の怪人を単独で撃破できるようならば、ヒーロー協会にとっても大きな戦力となることは間違いないだろう。分かった、僕の方でそのヒーローとやらを捜索してみることにしよう。場合によっては即S級に昇格することも考えておく」

どうやらアタシの要件は済んだみたいね。間抜け面のままワクチンマンを粉碎した謎の男の正体を暴かない限りアタシは納得できないわ。

あの捕らえようのない表情が抜け落ちた表情を思い出すとイライラしてくるのよね。「相変わらず対人関係が排他的なキミが他人にそこまで興味を持つなんて、キミが捜索を頼んだヒーローは相当に強かったのだろうね。僕もそのヒーローに出会えるのが楽

しみになってきたよ」

「強さは力よ。そして力がなければこの世界で生き延びることはできない。そうでしょう？」

アタシが語気を強めると、ようやくアマイマスクはほんの少し表情を崩したわ。

もしかしてアタシのポリシーに共感でもしてくれたのかしら？

そんなものはいらないのだけれど。

「最後の最後まで考えが合ったようだね。噂のヒーローに関しては発見次第キミにも詳細を伝えておくとするよ」

「しつかり頼んだわよ。じゃあね」

あまりいけ好かないこの男と長く会談するつもりはなかったからアタシは足取り荒く会談室から退室しようとしたけれど、アマイマスクはその前にアタシの心をかき乱すかのように問いかけてきたわ。

「キミも忙しいだろうから、僕がかけあえばギアスパーへの指導も終わらせることができるだろう。後から師弟関係を持続したいか途中で放棄するか選んでくれ」

「……」

アタシは返事を返すこともなく、ボタンと乱暴に音を立ててドアを閉めた。

失礼なことをしたとは全く感じなかったわ。アタシの方がそもそもヒーロー協会で

の地位は上だしアマイマスクもアタシをS級ヒーローから下ろすなんてことはしないでしようから。

ワクチンマンを倒したヒーローにも興味深々だったみたいだし放っておいても大丈夫でしょう。無理やりS級2位から下ろそうとしてくるのなら、むしろアタシがあいつをA級1位から叩き落すぐらいのことをしてもいいかもしれないわね。

それにしても……。

アタシはギアスパーのことをどうしたいのかしら。

グングン成長していくから鍛えがいがあっていう訳でもないし、惰性で師弟関係を続けていてもいいことはない、とは感じていたの。

アマイマスクには痛い所をつかれた形になったかもしれないわね。

(このままでいいのかしら)

ギアスパーのことはなぜか放っておけないとは感じているし、嫌いではないと言える。

けれどなんでアタシはそう思っているのか、アタシ自身がよく分かっていないわ。

だからどうしても、モヤモヤとしてしまう。

二度、すっかりギアスパーの真意を確かめる必要があるかもしれないわね。彼がS級を目指していることは知っているけれど、正直それ以外のことはなにも分かってない

わ

ワクチンマンを倒したヒーローのこと、弟子のギアスパーのこと。

普通の怪人退治のヒーロー活動とアタシのやるべきことは多いわ。

それに加えてB級で妙な派閥を作っている妹のフブキの動向も気になるトコロね。

あいつらはむしろ妹の成長を邪魔している気がしてならないわ。

一度怪人相手に痛い目を見た方がいい気さえしてしまう。もちろんフブキは無傷でなければいけないけれど。戦いはアタシー人で十分。

もしフブキとギアスパーが顔を合わせたらどうなるのかしら。ちよつと想像ができないわね。

ウマが合わずに喧嘩になるかもしれないし、ギアスパーが丁寧に敬語で対応して争いにはならないかもしれない。

アタシは様々な妄想を膨らませながら、アマイマスクと会談をしていた建物の窓から飛び去ったわ。

だつてイメージ力ってエスパーには大事でしょう？

あれこれ考えていて自分でも気が付いていない間に、アマイマスクから提案されていたギアスパーとの関係の解消の件については、無意識に頭から抜け落ちていたわ。

僕と『最強』

僕、ギアスパーの超能力発動にはムラがある。

タツマキ師匠との日々の訓練で少しづつマシにはなっているけれど、たまに全く発動しない時ができてしまうんだ。

不安定なのは過去の事件でできてしまった頭の傷も関係していると思うけれど、それでも僕は今もなおS級ヒーローを目指し続けている。

無謀だって言われる時もあるけれど、僕はその夢を叶えなくちゃならない。だって僕は……。

1人自宅の中で僕がそんなことを考えていると、急に地面が揺れ始めた。

前震の予兆がない不思議な地震だ。ズシン、ズシンと大きな縦揺れが一定のリズムを刻んで僕を襲ってくる。

まるで巨人が1歩づつ歩いているみたいな地震だった。

「このアースクエイクは不自然だね……！」

その時僕は猛烈な嫌な予感に襲われていた。ヒーローという職業上、どうしても異変には敏感になる。たまに発動する予知に頼ろうとしたけれど無駄だったので、僕は窓の

外を身を乗り出して覗き込んだ。どうかこの予感が外れてくれと感じながら……。

でも、僕の懸念は現実のものになってしまったんだ。

「嘘だろ!？」

僕は驚愕のあまり窓から外に転げ落ちるかと思った。だってそうだろう？

400メートルの高さもあるかと思うほどの人型の巨人が外を歩いていたんだから。

巨人が歩きたびにコンクリートは砕けビルは踏みつけられ、多くの人々が死んでいく。

「……………」

僕は窓からバリヤーで浮遊して飛び出していった。今日は調子がいいみたいだけれど、たとえ超能力が使えなかったとしても飛び出していただろう。

巨人が歩いているだけで被害は拡大し、怒号や悲鳴は大きくなっていく。警察や救急車のサイレンがあちらこちらから聞こえてくる。巨人は街を壊しながらにたりと笑っていた。

大勢の人間を踏みつけながら、こいつはどうして笑えるんだ？

かっとな頭に血が上った。頭がズキズキ痛みだす。今ならタツマキ師匠にも飛行速度だけなら勝てる気がした。僕は超能力を酷使してバリヤーに包まれながら巨人の頭まで飛んでいく。

「うきうきうきうきうきうき！」

巨人の肩の上には、眼鏡をかけた男が喜色満面の笑みを浮かべていた。

僕は語気を荒げて男に問いかけることにする。この男が巨人を操っているのならば諸悪の根源だ！

「お前が首謀者なら早く止めるんだ！この惨状を作り出してなにも思わないのか!?お前たちに人としての良心はないのか!?!」

最後の方の僕の叫びは悲鳴に似ていて。眼鏡の男に叩きつけるように放たれていた。

だが眼鏡の男は空を飛んでいる僕に狂気的笑みを浮かべた。眼鏡の男は汗は激しくにじみ出ており目は爛々と輝いている。明らかにまともじゃない！

「凄まじい力だろう！最強の弟と、科学の俺！このまま俺達兄弟が世界を支配するのだ！」

最強?こんな奴らが?

自分勝手な男の物言いに、プツンと理性の糸が切れるのを感じていた。

それだけの力を持ちながらどうしてそれを人のために使わないのか。

なぜここまで身勝手な世界征服とやらの子供じみた夢を語るのか。

僕の手はわなわなと震えていた。

「もっついで」

「……」

僕は空中で右手を伸ばす。眼鏡の男が首を抑えて苦しみ始めた。

折れない程度に超能力で首に圧迫感の負荷を与えていく。気絶させるつもりだった。

この男が首謀者ならばこの男を捕らえれば巨人が小さくなるか行動を停止するかもしれないという願望も、勿論あつたけれど。

僕自身がこいつを許すことができないという復讐心が大きかった。気絶させるのは最低限の良心だ。

「兄さん！」

だけど、男を気絶させるという望みはかなわなかったんだ。

異変に気付いた巨人の手の大振りの一振りは、空気を斬り裂きバリヤーを張っていた僕を容易く吹き飛ばした。僕は高度400メートルの高さから地面に猛スピードで叩きつけられていく。

吹き飛ばされ重力に引かれながら意識まで飛びそうになっても必死に精神力で堪えた。今バリヤーがなくなれば即死だ！

ドゴン!

急降下した僕とそのバリヤーは、再び大地を揺るがして地面に3メートルほどの大きなクレーターを作った。

巨人は僕にまたがるように立ち、見下ろす。

僕はよろよろとクレーターから立ち上がって頭を上げようとしたが、100メートル近くの巨人の全長を確認しきることすらできなかった。

「兄さんをよくも苦しめたな！俺の最強の拳を食らえー」

巨人が30メートル程はある腕を僕を殺すために振りに振り下ろしてくる。

拳が僕のバリヤーに当たると同時に地面には亀裂が入り、コンクリートは掘り返されて土や石までもが地面から吹き出る。吹き出た土砂は雨のように落ちてきた。

それでも僕のバリヤーは壊れない。最早怒りでネジが飛んでいる。

「お前なんか最強であるものか……!」

自分の身は自分で守るしかない、僕は幼いころに悟っていた。

いざという時に助けてくれるヒーローなんて、この世にはいないんだって。

だから僕はあの時に決めたんだ。

力をつけてみせるって。誰にも負けないような最強のヒーローになるって。

過去の僕のような理不尽な目にあっている人達を救えるような人になりたいって。

その夢を、自分勝手な世界征服とかいう野望でこいつらは踏みにじった。

こいつらが最強を語っていいはずがない！

「最強はお前じゃない、僕だ！」

「僕はヒーローの頂点に立つ、そしてその力で人を守ってみせる。そう誓ったんだよ！」

叫びは、怒りは、でも巨人の純粋な拳の暴力からは無力だった。

僕の物言いが気に食わなかったのだろう。振り下ろされる巨人の拳の連打は苛烈さを増す。

僕の頭痛はどんどん酷くなり、僕の周囲のクレーターは深さ200メートルにまで到達しようとしていた。

「いくら吠えようが、地上最強の男は俺だ！」

「違う、お前を倒して僕が最強のヒーローになる！」

僕は全力で両手を振り下ろし……限界を超えてしまった。

元々無理をしていたのを無理やり気力で押さえつけていただけに、一度精神力が崩壊すれば耐えることはできない。超能力の酷使の影響で頭から鮮血がドクドクと流れ出していく。

でも手応えはあった。僕が倒れるのと同時に巨人も倒れていく。

薄れゆく意識の中で、巨人を弾き飛ばした僕は薄い笑みを浮かべていた。

頂点に至るのは自分だと、強い思いを最後まで持ちながら。

「やるじゃない、とどめはアタシに任せてもらおうわ」

かけつけたタツマキ師匠の倒れた巨人の頭を捻じ曲げながらの賞賛だけは、僕の耳に薄っすらと聞こえていた。

病院で後から聞いた話だけど、科学者のフケガオは無事であり逮捕されたいらしい。

事件のあらましを全て吐かせてから死刑が濃厚なのだそうだ。

タツマキ師匠と僕の関係が変わって師匠からの指導が本格的になったのも、この日が切っ掛けだった。

——僕、ギアスパーはS級を、そして頂点を目指す。

この強い夢が僕のこの過酷な世界との、そして自分自身との長い戦いの始まりだったんだ。

僕とサイタマ

「いたた、メンタルがダメーシです」

タツマキ師匠との特訓を終えた僕は足に力が入らないままZ市を散策中だ。

僕の住んでいる場所はB市の近くなんだけど、たまには遠くを歩くのも悪くない。

空を飛んでシヨートカットができる僕ならではの考えだろうけれど。

マルゴリ、フケガオの兄弟との一件が終わってから師匠の特訓時間が大幅に増えた。

東京タワーより遥かに大きい質量の巨人を弾き返したのだから、万が一にも僕の超能力が暴走したら困るとヒーロー協会が懸念したのかもしれない。とにかく僕は疲労を隠しきれなかったんだ。

「すー、はー」

深呼吸して息を整えながら周辺を見渡したら、とある人物が目飛び込んできた。

その青年は黄色いヒーロースーツに白いマント。そしてハゲた頭をしていた。

いでたちを少し遠くから見た僕は、ピンとひらめくものを感じた。

既にヒーロー協会から捜索依頼が出ている、師匠が探していた人物かもしれない。

これは確かめなければ！確認しなければならぬので、僕は青年に大声で呼び掛ける

ことにした。

「そこのお方、ストップです！」

「なんだ？俺になんか用か？」

僕の呼びかけに反応した青年は体をぐるりと回して僕に向き直った。

どことなくコイツめんどくせえな、と思われてるように思える。

近くで青年と顔を合わせているとなんというか、威圧感というものが欠片もない表情だ。S級ヒーローとは正反対の印象を受ける。本当に師匠が認めるような強さを持ち合わせている人物なのだろうか。

とにかく僕は先に確認することにした。人違いの可能性は十分にあるだろう。

オーラの違いを考えるとむしろそうにしか思えない。

「あなたは個人で怪人退治をしていますか？」

「ああ、俺は趣味でヒーローをしていますサイタマという者だ」

サイタマと名乗った青年はどこか誇らしげだった。どうやら師匠が探していた人物に間違いがないらしい。それなら実力は災害レベル竜に匹敵するということになる。

僕はゴクリと喉を鳴らして慎重に接触することにした。

周辺の人々が僕たちを見てひそひそと話をしている。僕はヘッドギアをつけているしサイタマは恰好が変だから不審者同士だと思われるも不思議じじやない。涙が出そ

うだ。

僕は気を取り直してサイタマに質問をぶつけることにした。

「どうしてヒーローを名乗るならヒーロー名簿に登録しないんですか？」

「ヒーロー名簿？なんだそりゃ」

僕は思わずつこけそうになった。どうやらサイタマはヒーロー名簿の存在もヒーロー協会の存在も知らないらしい。世間に関心がないのだろう。どれだけ無知なんだろうか。

でも地位に執着していなさそうな所はS級に似ているかもしれない。

とにかく僕が説明をする必要があるそうだ。

「ヒーロー名簿を管理しているのはヒーロー協会なんです、そこに登録しないとヒーローと国から認められません。モンスターを倒しても評価されませんよ」

「別に趣味でやってるからいいけど、国から認められねーのか。ちよつとやだな」

サイタマはあまり気乗りしなさそうだけど、一応興味を示してくれたみたいだ。

僕の言動しだいだ。サイタマがヒーロー協会に入るかどうか決まるかもしれない。

ここでサイタマを逃がしたら、師匠にも怒られるかもしれない！

「サイタマさんの強さなら、好待遇で迎え入れられるはずですよ」

「めんどくさそうだな」

地位や名誉には興味がなさそうであり、サイタマは難色を示している。これはまずいかもしれない。僕はどうしようかと途方にくれた挙句……泣きつくことにした。

「お願いします、今サイタマさんを他のヒーローが探しているんです。悪いことにはなりませんので僕を助けると思っついてきて下さい。ヒーロー協会まで案内しますの
で」

「お前かなり困ってるらしいし、しょうがねえな」

僕の必死な説得にサイタマはなんとか折れてくれた。僕がほっと一安心したのは言うまでもないだろう。

本当に寿命が縮むかと思った……。

僕は話がまとまったので、道案内しながらサイタマと会話することにした。

師匠やアマイマスクさんが強く関心を持つ人物だ。僕も興味がある。

もしかしたらその強さの秘訣を聞けるようになるかもしれない。

「サイタマさんは光の球を放つ怪人を倒しましたよね」

「ああ、一撃で強さは分かんなかった。ちよっと期待していたんだけどな」

どうやらサイタマは、好敵手を求めているようだった。これだけの強さを持ち合わせているんだから不思議はないかもしれない。強敵がいけない苦しみは、僕には分からない。むしろ今僕は最強を目指す立場だからだ。

少しだけ気まずい沈黙が流れる。

「サイタマさんは、その力を持ってどう思いました？」

「つまんねーって感じた。世界の全てがつまらねえって」

僕は軽く苛立ちを感じたけれど、ここで怒っても単なる八つ当たりにしかならないだろう。

だから僕は聞く方向性を少しだけ変えてみることにした。

「じゃあサイタマさんは、今の強くなった自分からまた弱くなりたいと思っっていますか？弱くなれば戦闘がつまらなく感じることはない筈です」

「……弱くなれねーから、考えたことはなかった」

「もし弱くなれたとしたら、でもかまいませんよ。ドリームです」

「……」

サイタマは神妙な顔を شدした。どうやら真剣に考えているようだった。

やや間があつて、サイタマは僕に返答をしてくれた。

「なんか、やだな。俺も必死にトレーニングしたし」

「それでしようね」

僕は立ち止まって、サイタマに振り向いた。そして高らかに目標を告げる。

この人には嘘をつきたくないとそう感じたから。

「僕、ギアスパーは最強を目指しています。その先に退屈があったとしても僕は目指したい。」

どんな怪人も倒せて、危険から皆を救えるヒーローになりたいんです」

少しの沈黙が流れたが、サイタマはボーっとした表情を崩さない。

一体なにを考えているのやら、僕には全く読み取れなかった。

「そっか、がんばれよ」

軽い感じで返事を返してきたものの、僕の信念をサイタマは笑わなかった。

それどころか僕がそうなるのを待ち望んでいるようににかつと笑みを零した。

「それはそうと案内はしつかり続けろよ?」

「はい……」

僕は慌てて再び前を向き、小走りに道案内を続けた。

サイタマも小走りに欠伸をしながらついてくる。

僕とサイタマの考えは違うし実力は遠いけれど、それでも。

僕は頂点を目指し続けることをふたたび心から決意したんだ。

僕の案内でヒーロー協会に辿り着いたサイタマは、すぐにアマイマスクさんが見守る

中試験を受けA級2位になる。そして名前は広まってサイタマはZ市から住居を移動。

ヒーロー協会本部のA市に住むこととなった。

その結果様々なことが起こったのだけれど、それは後のお話。

僕と蚊とZ市と

夜、気合を入れた師匠との訓練の疲労もあつて僕はぐったりしながら布団に横になった。

ここ最近では強力な怪人が出現することもなく平和に暮らせている。

僕のC級の順位も50位付近まで上がって順調だ。これ以上、上がるためには超能力をコントロールする必要があるだろうけれど。

コントロールは段々ましにはなってきたけど完全じゃないからね。

「怪人出現の速報はあるかな」

僕はリモコンのボタンを押してテレビをつける。ピ、ピとチャンネルを切り替えてニュースが放送されているか探してみる。大体怪人が現れると番組が中断されて緊急ニュースがながれるんだけど。

「Z市を襲う地震は、日頃に大きくなっています。専門家も分析不能な地震は怪人の作業という説が浮上してきています」

「怪人が地震をとば、デンジャラスですね」

少し遠い場所だけれど、怪人の作業なら放っておく訳にはいかないだろう。

僕は翌日調査に向かうことを心に決めた。

「頭がまた痛みます。とてもバッドな予感がしますね」

杞憂であつて欲しかったけれど残念ながら、エスパーということもあつて僕のこういう悪い予感は大体当たつてしまうんだ……。

僕は翌日それを思い知ることになる。

翌日の早朝、様子を見るためにテレビをつけた僕はまたしても驚愕することとなつた。

ニュースが僕にZ市の危機を伝え続けている。しかも事件は1つではない。別の脅威がZ市を襲おうとしているようだった。

「揺れはどんどん強くなっています！今ビルが大きな地震で崩れました！災害レベル『鬼』です！」

「Z市に蚊の大軍が向かっています！災害レベル『鬼』です！」

「Z市の住民が大きな怪人に襲われたという情報が入ってきました。詳しい情報は届いていませんがA級ヒーローが負けたという情報が入っています！こちら脅威度から見て災害レベル『鬼』です！」

「いったいZ市で何が起こっているんですか……！」

どうやら複数の脅威がZ市に存在しているらしいけど、情報が錯綜しすぎて最早訳が分からない。

少なくとも災害レベル鬼が2つ以上Z市に迫っているということだけが辛うじて分かるぐらいだった。

「これは急いで向かわなければなりませんね……!」

僕は慌てて窓からZ市に飛び出した。最早一刻の猶予もないであろうことは明らかだ。

このまま放っておいたらZ市が滅びかねないし、ヒーローとして見過ごす訳にはいかない。

とにかく状況を確認しなければならぬだろう。

Z市は遠いけれど、僕はバリヤーで空を飛べるため他のヒーローより早く現場に到着することができる。蚊の大軍が来る前に地震の原因を突き止めなければならない。

僕は少量の蚊をバリヤーで防ぎながら現場に急行した。

「酷いことになっていますね……」

僕がZ市に到着した時には、建物の大半が崩れていた。

人々は蚊の大軍が押し寄せてくると知っているからなんとか逃げようとしているけれど、定期的に訪れる地震が酷すぎて車などではまともに動いていない。

僕が上空から周囲を見渡すと、A級ヒーローが倒れている所を発見した。

あれは、A級ヒーロー1位で上位の実力を持つと言われている人物だ。

「ステインガーさん!?!」

特徴的なタケノコの槍を持っているから間違いないだろう。小目標として上位ヒーローを目指している僕はしつかりA級ヒーローの特徴を覚えていた。

僕が慌てて駆け寄ると、ステインガーは槍を杖のようにして立ち上がろうとしながらも血の塊を吐く。顔色も悪い。完全に重症のようで、一刻の猶予もないだろう!

「お前はタツマキの弟子ギアスパードだったな。俺ともあろうものが怪人にやられちまった」

「そんな……!どんな怪人にやられたんですか!?!」

「今プリプリプリズナーが戦ってるが苦戦している、お前じゃ厳しいぞ」

「僕はタツマキ師匠の弟子です!どうにでもします!このままじゃあなたの命も危ない!」

「……分かった、信じるぜ。俺を庇ったぶりぶりプリズナーは怪人と戦いながら東に向かった」

「すぐに向かいます!」

「頼んだ……!」

僕はスティンガーさんを横たえた。Z市に徐々に蚊が増えつつある。どうにかしなければならぬ。

とにかく大きく分けて現在の脅威は3つだと分かった。

蚊の大軍。これは操っている怪人がいるのかもしれない。

大きな地震。これも原因となる怪人がいる可能性がある。

スティンガーを倒した怪人の脅威そのもの。ぶりぶりプリズナーが苦戦しているところから災害レベルは鬼以上だ。

「人手が圧倒的に足りません、どうすればいいんですか……！」

僕はとにかく1つ1つ片付けていこうと、まずぶりぶりプリズナーが苦戦していると、いう怪人の方に向かうことにした。そこで僕が目にしたのは……。

大きなムカデ2匹と、それを素手で倒そうとするぶりぶりプリズナーの姿だった。

一匹は家ぐらいなら巨体で押しつぶせるぐらいの大きさだ。プリズナーは拳で怪人を倒そうとしているけれど、装甲が硬すぎて弾かれてしまっている！

「プリズナーさん！」

僕が怪人とプリズナーに呼び掛けると、複数の視線がこちらを向いた。

「なんだ、雑魚か」

「俺たちムカデ先輩と後輩にはかなわない！」

怪人の名前はムカデ先輩と後輩というらしい。わざわざ自己紹介してくれた。

大きいのが先輩で小さいのが後輩みたいだ。覚えやすく助かるけれどプリズナーが苦戦しているのだから相当強いはず。

プリズナーもちらつと後方を見て僕に気付いたようで、ムカデ2匹と渡り合いながらも僕に言葉をかけてきた。流石に声色が必死なのは緊急事態だからだろう。

「ギアスパーちゃんか。最近注目の男子だからバッチリ覚えていたぞ」

「今どんな状況なんですか!？」

「地震は恐らくこの怪人と関係がない!原因は全く別の所だ!」

「やつぱり……!援護します!」

プリズナーの横に並びながらもこの時点で僕は猛烈に嫌な予感がしていた。同性愛者のプリズナーに僕が名前を覚えられているのは勿論そうだけれど、今はそれどころじゃない。このムカデ型の怪人には見覚えがある。確か僕の記憶が正しければこいつらより更に上が居る!

「地面を揺らすのはどいつだ……!」

案の定地面の底から大声が聞こえてきて、轟音と共に地面が割れる。僕の予感当たってしまった。

体長1000メートル以上ある『大怪蟲』が姿を現す。Z市のビルは粉々になっていき、その波打つ巨体のがのたうち回るだけで甚大な被害が起こっている。

僕はその巨体を見つめて、その名前を静かに口にした。

「ムカデ長老……！」

かつてブラストと戦った怪人。災害レベルはもちろん『竜』。

地震が揺れ続き蚊の大軍が押し寄せてくる最悪の状況の中で、マルゴリに負けない威圧感を持った巨体が絶望となって僕たちに襲い掛かろうとしていた。

僕と乙市の危機とぷりぷりプリズナー

プリズナーと直角以上に戦う災害レベル鬼のムカデ先輩とムカデ後輩、そしてプラストでさえも仕留めきれなかったと噂されている災害レベル竜のムカデ長老。加えてムカデ長老が出現した原因であろう謎の地震の悪化。さらに蚊の大軍まで向かってきている。乙市はいまだかつてない壊滅の危機を迎えようとしていた。

「ここはデビルに魅入られた街ですか!？」

「じゃあお前も地獄に送ってやるよ!」

泣き言を言っではいられない。僕は突進してくるムカデ後輩をバリヤーで弾き返した。大きなムカデは純粹に気持ち悪いし、怪人以前にあまり近寄ってほしくない。

鈍い音と共にムカデ後輩が跳ね返されて地面に落ちる。マルゴリと張り合えたこともあつてこの程度の相手なら防御力の心配をする必要はなさそうだし、強力な超能力を使う必要もない。十分戦える!

「てめえ、ヒーローの分際でかわいい後輩をよくも傷つけてくれたな!」

「早く死にたいとみえる」

ムカデ先輩とムカデ長老が地面を這いながら僕に襲い掛かろうとしている。

とはいえ迫力はかなり違う。ムカデ先輩は小さな家1つぐらいのサイズだがムカデ長老は小さな雪山1つ分ぐらいの全長1000メートルだ。横幅も大きくテレビ番組の怪物よりよほど大きい。山ほどの質量が地面を這いまわるだけで乙市の被害は大きくなっている。

早く止めないと！

僕はファイティングポーズを取り続けているプリズナーに呼び掛けた。

「プリズナーさん。僕がムカデ長老と戦うので、なんとかムカデ先輩と後輩を倒せませんか!」

一見S級のプリズナーとC級の僕の会話じゃないようだけれど、プリズナーが先輩と後輩2匹相手に互角だったことを考えるとこちらのほうがいいと思う。

案の定納得してくれたみたいで、プリズナーも大きく頷いてくれた。

「分かった、ギアスパークちゃんを信じるぞ」

プリズナーが突進してくるムカデ先輩をがっちり両手で抑え込んで、僕はバリアーを張ってムカデ長老に立ち向かう。僕を包み込むように張られた薄い膜をムカデ長老は体重をかけて押しつぶし、粉々にしようとした。周囲のコンクリートが陥没していく中僕は副作用の頭痛に襲われながら全力でムカデ長老に抗っていた。

一方のプリズナーは、なにやらムカデ2匹と戦いながらぶつぶつと独り言を口走りだ

した。

「くそう、俺の拳じや威力が足りない……ムカデの装甲を破壊することができない。俺の拳から血が出てしまっている」

僕はS級ヒーローのふがいなさに失望しそうになっていたけれど、プリズナーの変態性と狂気が発揮されるのはここからだ。流れ出たプリズナーの血が指先に集まって伸び始めたんだ。赤い血が大きくプリズナーの両手から飛び出していき、そして僕が見守る中で固まっていく。

長さ5センチほどはあるだろう。赤黒くて気持ち悪い。どんな体の仕組みをしているんだらうか……。

「俺の天使の拳に爪が!？」

「単なるプリズナーさんの拳から流れた血ですよ!」

驚くプリズナーに、僕はバリアーを張りながらツツコミを入れざるを得なかった。

プリズナーは僕のツツコミを華麗にスルーして、引いているムカデ先輩と後輩に向かって血でできた赤い爪を向けた。いや、聞けよ!というか怪人すら気持ち悪いと思うってどうなんだよ!

だめだ、まともにプリズナーと接していると僕のキャラまで壊れ始めてしまう。

S級が壊れていると噂されている意味がよく分かった。

「このエンジェル☆ネイルで俺の破壊力が上がった。もうお前たちに勝ち目はない」

「後輩、こけおどしだ！俺達の装甲は貫けない」

「ああ、突進だ先輩！」

ムカデ先輩とムカデ後輩が再びプリズナーに向かっていくが、そこでプリズナーの拳がうねりをあげた！

「ネイル☆エンジェル☆ラッシュュ！」

赤い爪を生やしたプリズナーの拳の連打は先程までと違ってあつさり2匹の装甲を貫いていく。

一瞬でムカデ2匹を倒してしまったプリズナーに僕は啞然としつつも、こう言わざるをえなかった。確かに攻撃力は上がっているみたいだけれど、爪だけじゃなくて拳がそのまま装甲を丸ごと貫通している。これって……。

「その攻撃、爪関係ないのではないですか!？」

「無事ムカデ2匹は倒したぞギアスパーちゃん！」

プリズナーの表情はキラキラしている。目をつけている僕にいい恰好でも見せたかったんだろうか？ またもや僕のツツコミは無視されてしまったし最早考えるだけ無駄なのかもしれない。僕はムカデ長老の巨体をバリアーで支えながら、超能力とは別の意味で精神力がガリガリ削れていくような気がした。

「おのれ、よくも！」

仲間を倒されて怒ったムカデ長老が、しぶとい僕を無視してプリズナーを狙う。

プリズナーはこの巨体から身を守る術がない。どうすれば……！

しかし僕が行動を起こす前に、プリズナーの体が地面に潜り込んでいった。

「エンジェル☆ネイル☆クロール！」

プリズナーは地面を水面のようにクロールで斬り裂いて高速移動をして猛スピードでムカデ長老の巨体を避けていた。完全に水泳選手を彷彿とさせる滑らかな動きでコンクリートの地面を泳いでいる。こいつはいったいなんなんだろう。

「これもエンジェル☆ネイルで貫通力が上がったおかげだ」

「へえそうですか、アンビリバーボーです」

はつきり分かる程僕の声色は棒読みだっただろう。爪は最早関係ないけれど、プリズナーが強大な力を手にしたことだけは僕にも分かった。

そういえば先程から地震が止んでいるし蚊も消えた。どうしたんだろう？他のヒーローが活躍したのだろうか、とにかく。

「これでムカデ長老に集中できますね！」

「増援もきている。強敵相手だが俺とギアスパーチちゃんなら勝てるはずだ！」

ファイティングポーズを取り続けるプリズナーに、頭痛に襲われながら超能力を十全

に使おうとする僕。Z市の運命をかけた僕とプリズナー対ムカデ長老の戦いは、もうすぐ終わりを迎えようとしていることだけは間違いないかった。

僕たちはこの強敵との戦いを乗り越えなければならぬ。それは僕がこれから頂点を目指す上でも重要なことでもある。

ムカデ長老の装甲は他2匹とは強度が違う。プリズナーのエンジェルネイルでも倒せるかはかなり怪しいだろう。しかしやるしかない。僕たちにZ市の命運がかかっている！

僕は必死の形相をしながら勇敢にムカデ長老に立ち向かっていった。

僕と『狂っている』ということ

「ひたすらに大きい、速い、硬いですね」

僕はコンクリートを砕きながらグネグネとうねるムカデ長老を見上げてゴクリと唾を飲み込んだ。ムカデ長老の強さは非常に分かりやすいし、だからこそ攻略法が分からず厄介だ。

師匠なら超能力で硬い装甲ごと粉々にすることができるかもしれないけれど、それでも僕はそこまでの超能力を発現させることに抵抗感があったんだ。

……もしムカデ長老をも捻じ切るような超能力が暴発してしまつたら？

僕は忌々しい幼少の頃の記憶を思い出す。超能力が目覚めた瞬間周りの皆が僕を怪人扱いして恐れていた。鳴り響くサイレン、震える声、恐怖の眼差しを忘れたことはない。僕の超能力が暴走すれば今度はその扱いを街中の人から受けるかもしれない。そんなことは耐えられない！

葛藤しうつむき気味になっている僕の肩に、ポンと温かい手が置かれた。

「震えているぞ、ギアスパークちゃん」

「プリズナーさん……！」

さつきまで災害レベル鬼の怪人2匹に苦戦していたのに、プリズナーの表情はとても明るい。声色はいつも通りで、ムカデ長老の巨体相手に負けることを全く考えていないみたいだった。

「共に戦っていて感じた。ギアスパークちゃんならS級ヒーローになれる。俺より潜在能力が高いだろう。それはギアスパークちゃんも薄々気付いていたはずだ。俺は一般的な成人男性ぐらいの強さだからな」

確かに僕は、先程までの戦いで傲慢にもプリズナーのことを自分より下だと一瞬感じてしまった。だけれども、僕の失礼な考えを読み取ったというのにプリズナーさんは快活だった。

もしかするとこれが、『S級ヒーロー』のメンタルというもののなかもしれない。

「ギアスパークちゃん自身もS級ヒーローを目指しているんだらう？ならばもう少し『狂って』もいいんじゃないか？ギアスパークちゃんにはその権利がある！俺は信じている！」

不思議な言い回しだけでも、プリズナーさんが伝えようとしている意図が分かった気がした。A級より下のヒーロー達がよく口にする、S級に対しての諦めの言葉だ。

S級は狂っている。

僕はなにをしていったんだろう？今の僕は狂っていない。それどころか自分自身の力に怯えている始末だ。

このままでいいはずがない。僕の現在の目標はS級であり、そして最終的にヒーローの頂点になること。

どんな怪人も倒すことができる存在になることだ！

「ありがとうございます、ふりふりプリズナーさん。おかげでヒーローハートがマックスです」

僕は闘志を燃やしながらプリズナーさんに感謝を述べる。

「ここでリスクに怯えているような人間が、最強のヒーローになれるはずがないですね！」

「話はそこまでか!?百足大うねり！」

速度を上げて引き殺そうとするムカデ長老を睨み付けながら僕は師匠の超能力の使い方を改めて思い出す。僕は自然と獰猛な笑みを浮かべていた。枷から解き放たれた猛獣という表現が僕の現状に相応しいかもしれない。不思議と今の僕ならなんでもできる気がした。

「頂点動力死！」

「……!?!」

僕が力を込めるとバチバチという火花が散る音と共に巨大なムカデ長老の動きが徐々に減速し、停止していく。僕は超能力をコントロールしながらも、その時確かな手応えを感じていた。

「よくやったぞギアスパーちゃん！ここで仕留める！」

プリズナーが僕の援護をしようとするムカデ長老の顔面に飛び掛かっていく。

僕にはプリズナーの姿が妙に輝いて見えた。その光は暗闇を照らす電灯のようである……。

ちよつと待った。僕の両手が塞がっていなければ目を擦っていただろう。電灯のようじゃない、実際に拳が光っているじゃないか！

「ギアスパーちゃんの奮闘を見て、闇の心に墜ちかけていた俺の道が光に戻ってきた」「そうですか」

「どういう理屈なのかは知らないけれど、また強くなったみたいなので僕は適当に頷いた。」

「闇を浄化する拳を食らえ！ライト☆ネイル☆エンジェル☆ラッシュ！」

拳自体が光を放ちながら、赤黒い血の爪が飛び出ているよく分からない形態の猛打が停止しているムカデ長老の顔を襲う。どうだ!?

「グオオオオ……！」

拳が当たったところから浄化の煙が出ていて、ムカデ長老が苦しさにのたうち回ろうとしているのが抑え込んでいる僕の腕に伝わってきた。攻撃は間違いない効いている！

ビキビキとムカデ長老の装甲にヒビが入っていく。

「これが俺の光の拳だ……！」

「プリズナーさん逃げて下さい！」

マッスルポーズを披露して勝ち誇るプリズナーだったけれど災害レベル竜は、そう甘くはない。ムカデ長老は死にかけているんじゃない、無理やり脱皮をしてさらに大きくなるうとしている！

「よくも好き放題やってくれたな！」

皮を脱ぎ捨て脱皮したムカデ長老は僕の超能力から一瞬で抜け出すと、プリズナーをその巨体で轢いて地面に叩きつけた……！

ボキッ、という嫌な鈍い音が聞こえてプリズナーの体が大きくバウンドする。

「く……！」

「プリズナーさん……！」

うめき声をあげて倒れたまま動かないプリズナーの心配をしている場合じゃない。

ムカデ長老は僕もこの勢いのまま殺そうとしている。肉体派じゃない僕は轢かれた

らひとたまりもない！

マルゴリの時とは違う。もう僕1人でどうにかするしかない。

自分の身は自分で守るしかない。いざという時に誰かが助けてくれるなんて思っ
てはいけないんだ。

僕は必死に頭を回して勝算を探る。

タツマキ師匠の力ならムカデ長老を超能力でひねり潰すことができたかもしれない。

僕にはそれができなかつたけれど、師匠にも持ち合わせない僕の武器がきつとあるはずだ。

そうだ、あの超能力を応用すれば……！！

サイズが1100メートルほどに一回り大きくなったムカデ長老が、正面から全力を込めて僕に突進してくる。複数ある顔の表情には油断は一切ない。先程までの戦いで僕を明確な脅威だと認めただ。

「長かった戦いも終わりだヒーローー！」

「僕は逃げない、こいムカデ長老！」

ムカデ長老が突進し、僕は突進してくるムカデ長老に手を伸ばした。

僕とムカデ長老は交錯し、そしてZ市内に響くようにボガン！という轟音が鳴った結

果——。

「馬鹿な……なにがおこったのだ!？」

——果たして最後まで立っていたのは僕、ギアスパードだった。

ムカデ長老は、愕然とした表情で頭の高から尻尾まで綺麗に真っ二つになっている。

「頂点念防刃……僕のバリアーの防御力を一点特化して大きな刃にしました」

息も絶え絶えに頭から血を流しながらも僕は計画がうまくいったことを確信した。

性格の問題もあるだろうけれどマルゴリの拳を耐え、ムカデ長老の全体重をも耐えた僕のバリアーの防御力は、タツマキ師匠以上だと自信を持って胸を張れる唯一の大きな武器だった。僕はそれを攻撃に変えたんだ。

「あなたは停止している鋭利な刃に自ら突っ込んでいったんですよ」

僕は大声で逃げない、とわざわざ布石をうっておいた。綺麗に僕の戦術にムカデ長老が嵌ってくれた形になる。

「まさかブラスト以外に負けるとは……!」

真っ二つになったムカデ長老はひくひくと痙攣しながらも、動かなくなった。

言葉を話す力が残っていたあたり尋常じゃない生命力だ……。正攻法では勝てなかっただろう。

もう聞こえていないだろうけれど、僕はムカデ長老の亡骸に声をかける。

今の僕には怪人相手とはいえ、強敵相手への敬意のような奇妙な感情があった。「いずれ僕はそのブラストも超えてみせますよ」

その後僕はプリズナーとステインガー達の無事を確認することができ。

こうして僕とムカデ長老の死闘は終わり、同時にZ市の危機も過ぎ去ったんだ。

僕とアマイマスクと新たな任務

あの死闘から数日。新聞に目を通して僕はZ市の情報を探していた。

「悲惨な事件でしたね」

Z市の危機が過ぎ去ったけれど、それはあくまで人々の命の大半が無事だったただけだ。

災害レベル鬼4体、竜1体が同時に襲撃してきたんだから当然被害は大きい。

特に、暴れまわるムカデ長老の姿は人々に大きなトラウマを植え付け、結果的にZ市に住民は全くなりなくなってしまった。

結局あの事件の全貌は地底王が地震を強めていった結果地面に住んでいたムカデ長老が暴れ出したというもので、蚊の大軍のほうは自然発生した怪人らしい。

地底王の方は駆動騎士が、蚊の怪人の方はフラッシュが相手をして圧勝したと聞いている。

ニュースを見て駆けつけたのは僕たちだけじゃなかったってことだろう。

「今日はアマイマスクさんに呼び出しがあった日でしたっけ。行きましょう」

直接呼び出されたことは今までなかったから、アマイマスクは僕を見極めようとして

いるんだと思う。ブラストさえ倒せなかったムカデ長老を撃破したのだからいよいよ無視できなくなつたのかもしれない。少なくとも普通のヒーロー活動はしているからC級の今より悪くなることはないと考えれば安心できる。僕は身だしなみを確認し、心を落ち着かせてヒーロー協会本部に足を進めた。

数分後僕はヒーロー協会本部内で、特徴的な青い髪と有名な美形の整つた顔を見つめることができた。

「キミがタツマキの弟子のギアスパーか」

「よろしくお願ひします」

「悪い案件で呼び出してはいないから、ある程度は気を楽しんでいる。きみのその真面目さをタツマキも少しは見習うといいんだが」

僕は画面越しということもなく、直接アマイマスク本人がくるとは思わなかつたから少し緊張して声が上がってしまった。アマイマスクが気にしていないようで安心したけれど。

アマイマスクの表情は硬くて、よく僕を観察しているみたいだった。

「話は単純だ、僕はキミのランクを上げて、B級ヒーロー以上に昇格させようと思つている」

「光栄です」

「希望の順位を言つて貰つてもいいかな？それともA級以上に上がりたいかい？」

アマイマスクの表情が僅かに鋭くなった気がした。

どうやらアマイマスクは僕を試している。僕がどのくらい向上心があるかも含めて僕という人物を見極めようとしているみたいだ。なら話は早いだろう。僕はここで志を曲げるつもりはなかった。

あれから超能力の調子もいい。今の僕ならあの地位が相応しいはずだ。

「では、僕はS級を希望します」

「随分と贅沢な奴だ、遠慮というものを知らないと見える」

「僕の超能力は安定してきています。客観視しても僕はS級に相応しいはずですよ。」

アマイマスクさんが僕をB級に置いたとしても、僕は必ずS級に上がりますが」

「前言撤回しようやっぱりキミはタツマキの弟子に相応しいようだ。とはいえ今の自分が相応しい位置を分かっているのなら……いいだろう」

僕はかなりずけずけと言つてしまったけれど、僕の強い意志を聞いたアマイマスクは表情を緩めて少し安心したみたいだ。どうやら僕の遠慮のなさがいい方向に働いたら

しい。

「マルゴリの撃退、ムカデ長老の撃破等の実績を加味してギアスパー、キミをS級最下位に昇格させるよう進言しよう」

「ありがとうございます！」

僕は心の中で大きくガッツポーズをした。目標の1つであるS級に昇格することがやっとできた。思わず表情が緩みそうになった僕をアマイマスクは強くたしなめた。

ヘッドギアをつけていても、僕の気のゆるみはアマイマスクに筒抜けだったらしい。分かりやすかったのは気をつけないと……。

「S級ヒーローになるということは、それ相応の責任も伴う。A級以下のヒーローの模範になるような『圧倒的な力』を持ち続けることだ」

「分かりました、これからはそう心がけます」

「口だけならどうとでも言える。本当に理解をしているのかな……？今のキミには大きな課題が1つ残っているからね」

「……………」

僕はなんのことだか分からず怪訝な表情を浮かべたけれど、アマイマスクはあいまいな薄い笑みを浮かべるだけだった。何を企んでいるんだろうか、今の僕には分からなかった。僕が自分の課題に思い悩んでいると、アマイマスクは唐突に話題を変えてきた。

「話が変わるけれど、今現在閃光のフラッシュが行方不明になっていることは知っているかな？」

「ヒーロー協会内部で話題になっていましたので、噂だけは知っています」

スキンヘッドの軍団が暴れまわっていたという話はあつたけれど、それもいつの間にか収まっていたことだし、今のヒーロー協会の大きなニュースはそれだろう。

S級が行方不明になるという事態になることは今までなかったから、他のヒーロー達は皆衝撃を受けていたし動揺が広まっていた。

「それなら話が早いな。フラッシュの任務遂行の速さを加味すると、未だに連絡がない以上怪人に敗北した可能性が高い。

他の忍者が関わっているのかもしれない。S級を1人つけるからキミにこの案件を任せる」

「フラッシュの探索任務を了解しました」

「この事件をうまくキミが解決するかどうかで、本当にキミがS級になれるかどうか決まることだろう。無様な姿を僕に晒さないことだ」

アマイマスクの口ぶりは重々しい。S級での戦闘力上位のフラッシュが敗北したのだから、犯人はかなりの実力がある人物に違いない。これも災害レベル竜以上の案件な

気がする。

実質的な僕のS級昇格試験だ。失敗は許されない。

僕は気合を入れて強く気を引き締めた。

それから1時間後、僕は集合地点で相方として送られたS級ヒーローを待っていた。

「合流地点はここかな」

地図を確認する。待ち合わせ場所は間違っていないみたいだ。しばらく僕が待機していると、大きな人影が僕の前に姿をあらわした。黒くツヤツヤな筋肉を持つあのヒーローの特徴に当てはまるのは1人しかいない。僕は再び戦闘力上位のS級ヒーロー相手に緊張しながらもにこやかに呼び掛けることにした。

「待っていました、超合金クロビカリさん」

「お前がギアスパーか。フラッシュが敗北するとは余程の緊急事態のようだな。俺の筋肉の鎧が躍動する時がきたようだ」

「主犯と思われるのは、確か進化の家という宗教団体でしたっけ」

「どうやらフラッシュはソニックという人物の救出に向かったらしいが、詳細は不明だな。進家の家のアジトは忍者を雇ったらしく、警備が見抜かれてしまう。気を引き締めて向かうでしょう」

「進化の家と忍者が手を組んでいるんですね……?」

僕はクロビカリと襲撃計画を進めながらも、背筋に冷たい汗が流れていく気がしていた。

アマイマスクが僕に言った課題という意味がようやく分かったからだ。

今までの敵はマルゴリ、ムカデ後輩、ムカデ先輩、ムカデ長老という大柄な敵が多かった。逆に言えば攻撃を見切るのが簡単だったということでもある。

けれども今回の敵はそれとは真逆の高速で移動し攻撃できる忍者たちだ。

僕の身体能力は他のS級ヒーローと違って並でしかない以上、超能力を発動する前に殺されればひとたまりもないんじゃないか……？

「これは今回の任務も、デンジャラスブリッジですね……い！」

それでも、やられっぱなしじゃヒーロー協会の面子が丸つぶれだ。なんの切っ掛けか手を組んでしまった進化の家と忍天党という2つの新しい脅威に僕達は立ち向かわなくちゃならない。

これがソニック、フラッシュの救出作戦の始まりだった。大きな怪獣から小さな人間へと、僕の戦う相手は移り変わっていく。

僕と現状整理とジェノス

どういう切っ掛けか協力してしまった進化の家と忍者たちをどうにかしなければならなくなった僕とクロビカリだったけれど、僕は2つの大きな問題に頭を悩ませていた。

1つは僕の反射神経や身体能力そのものはC級ヒーロー並みだから、高速で動き回る忍者たちをまともに相手するのが厳しいということ。これから進化の家の本拠地に向かう訳だけれど、気が付いた時には首が飛んでいた、ということになりかねないんだ。

かといってここから進化の家までずっとバリアーを張った状態で移動する訳にもいかない。超能力の使用は精神力を消耗するし、使いすぎると副作用で頭から血が出るリスクもある。

そしてもう1つは……。

「今回は怪人相手とは違って、人相手に超能力を使わなければならないのですか」

「なんだ、人間相手に力を使ったことがないというのか？」

「お恥ずかしながらヒーローになってからこのような事態を想定していなかったもので」

怪訝そうに問いかけてきたクロビカリに、僕は軽く頬をかいた。

相手の忍者たちはこちらを殺すつもりでかかってくるだろうけど、僕には僅かに人に力を使う躊躇いがある。

不殺主義という訳じゃないけれど、怪人を相手にするのは人を明確に害するのとは心境が大きく異なってしまうだろう。超能力を使う時はイメージが大切になるから痛いけれど、どうにかしようと思ったところですぐに解決できる問題じゃない。

考えれば考えるほどきついつい任務な気がしてきたけれど、だからこそアマイマスクから僕に大きな課題があると言われた意味はよく分かった。

この2つが重荷になった僕とクロビカリの作戦はうまくまとまらなかったけれど、僕がもたもたしているうちに金髪の青年が声をかけてきた。体が普通の人間じゃないみたいだ、サイボーグ……？見慣れない人物だからヒーローじゃないみたいだけれど、誰なんだろう？

「お前たちはヒーロー協会の人間だな」

「ああ、間違いないぞ。そういうお前は誰だ？」

敵かと僅かに身構えた僕とクロビカリにかまわず、金髪のサイボーグは名乗ってきた。俺は個人で正義活動をしているジェノスという者だ。閃光のフラッシュの所在を知り

たい」

「どうやら敵ではなさそうだし、進家の家に突入する前の情報交換をしておくのは悪くないかもしれない。なんたつて僕たちは今回相手の戦力すら全く分かっていないんだから。」

S級が狂っているとはいっても、ある程度の戦術を立てるといえるのは悪くないと思う。この状況で僕とクロビカリが突っ込んでもクロビカリはともかくとして僕が死ぬ未来しか見えないことだし。進化の家と忍者が手を組んでいる現状にも違和感があつたから現状整理もしたい。

「クロビカリさん、敵地に突入する前にこの方のお話を聞いてもいいでしょうか」

「……仕方あるまい。筋肉を持たない者は大変だな」

クロビカリの僕を憐れむような視線に苛立ちを覚えながら、僕はジェノスと情報を交換し始めた。少なくとも無駄な時間にはならないはずだし前回の戦いでぶりぶりプリーズナーに似たようなことを一瞬考えてしまった僕に人のことは言えない。

ジェノスと僕が詳しく立ち話をした結果、色々なことが分かった。時系列的に起きたことをまとめてみる。

ことのあらましはこうみたいだ。

「どうやらジェノスはあのZ市の事件で蚊を操る怪人と戦っていて、死にかけていたと

ころをフラッシュに助けられたみたいだ。僕がムカデ長老と戦っている間にそんなことがあったなんて思いもしていなかった。フラッシュも怪人の報告しかしてなかったし……。

Z市に現れた蚊を操っていた怪人は進化の家が作り上げた怪人だったみたいで、進化の家が忍者の身体能力に興味を持ってしまった。その結果新都団と戦っていたS級賞金首の音速のソニックが進化の家に連れ去られ、それを知った同期だったフラッシュがソニックを救出しに進化の家のアジトに単独で突入しようとした。共闘しようとしたジェノスは置いていかれて、進化の家が分からずにどうにもならなかったみたいだ。

「俺が知っているのはここまでだ」

「ソニックも忍者だとするのなら、忍者勢力が進化の家に目をつけた理由も分かりますね」

フラッシュはS級ヒーローの中でも上位の実力者だから、簡単に負けるとはあまり僕には思えない。でもフラッシュが襲撃したタイムミングの時には忍者が既に進化の家の味方になっていたというのなら色々納得できる気がした。なんせ進化の家が一方的にフラッシュの手の内を分かっているのだから色々対策もとれるはず。

「純粋な共闘関係なのかそうなのかは分からないですが、限りなく厄介ですね」

「フラッシュは命を救って貰った恩人だ。俺と模擬戦をした仲でもあるから見捨てる訳

にはいけない。進化の家の場所を教えてください」

「どうしますか、クロビカリさん？」

「部外者を巻き込みたくはないな、災害レベル鬼に敗北する程度では足手まといになりかねん」

「俺は足手まといになるつもりはない。今の会話でお前たちが進化の家の拠点を知っていることが判明した、お前たちが協力を拒否するのならば、後を追跡するだけだ」

「どうやらジェノスは全くフラツシユの救出を諦めるつもりはないみたいだ。」

「眼光は鋭く意思の強さを感じられる。こういう表情をしたヒーローは沢山見てきたし、諦めを期待するのは無駄かもしれないな。」

「クロビカリも同じことを判断したみたいで、大きな溜息をつく。ジェノスを救出作戦に組み込むことにしたみたいだ。」

「その結果、僕の大きな悩みが1つ解決した。」

「忍者が高速で動き回る生体反応は、俺のセンサーで確認できる。フラツシユのデータも取った。お前が瞬殺される心配はいらないだろう」

「ジェノスさん頼りになりますね、お願いします」

「僕は安堵したけれど、これは決してアマイマスクの課題が解決した訳じゃない。」

「この任務が終わったらタツマキ師匠と反射神経を鍛える訓練をするか、敵の殺気に反

応じて自動でバリアーを貼る特訓をするかなどの対策を練る必要がある。

ジェノスに頼ったから今回すぐにS級ヒーローには上がれないかもしれないけれど、そこは仕方ない。

「こんな作戦会議など無駄だと思うがな、俺の筋肉の鎧は誰にも貫くことはできない」

どこか慢心気味にポージングを決めるクロビカリだったが、僕は少し不安だった。

なんとといっても閃光のフラッシュシユが負けた相手なんだ、警戒しすぎるにこしたことはないと感じる。

「アマイマスクさんから渡された情報によりますと、確かブラストを苦しめたのも忍者だった気がしますね」

「ブラストとは誰だ？」

「ヒーロー協会S級1位のトップヒーローですね。僕の目標です」
「お前も俺と同じく強さを求めているのか」

どこか親近感を感じたらしいジェノスに僕は思わず黙りこんだ。話を聞く限りジェノスはフラッシュシユにストーカーみたいにつきまとっていたらしいから、一緒にしないで欲しいと思わず言いそうになったけれど、特訓するか見て学ぶかのやり方の違いではないだろうし……。

「……とにかく、忍者の首領も強敵です。警戒は怠らずに進化の家に向かいましょう」
領くジェノスとクロビカリを横目に、僕は考えこんでいた。

今気づいたけれど、僕はプラストが仕留めきれなかった相手と連続で戦うことになる
かもしれない。

これが偶然なのか天命なのか、はたまたアマイマスクが仕掛けた必然なのかは分
からないけれど、頂点を目指す僕にとっては悪い気分じゃなかった。

状況を整理して懸念点が消え、ジェノスという戦力が増えた僕たちは改めて進化の家
へと歩き始めたんだ。

僕と忍天党の忍者たち

僕とクロビカリはジェノスという新戦力を加えて順調に進化の家に向かって歩いてきた。

住宅街を通り過ぎて、人気の少ない山道に入った僕たちは山をすると登っている。このあたりは木々や茂みがあちこちにあるから忍者のトリトリで襲撃するにはもってこいの場所だろう。クロビカリは警戒する必要がないからのっしのっしと大胆に大股で歩いていたらけれど、僕とジェノスは神経を尖らせている。そんな僕の様子を見かねて、とうとう呆れたクロビカリが声をかけてきた。

「ヒーローではないジェノスはともかくギアスパー、お前はそんなありさまで本当にS級ヒーローになれると思うのか？ 小鹿のほうはまだ勇敢だ」

「……」

僕はクロビカリになにも言い返すことができなかった。先程から苛立っている理由がよく分かった気がする。それはクロビカリにじゃない、自分自身へのふがいなさだ。確かにタツマキ師匠やブラストならば、間違いなくもつと大胆に動いていただろう。

あの2人は自分の実力に絶対的な自信があるはずだからだ。

ジエノス頼りになっていようように、他人の生体反応に頼らなくても忍者に負ける所が想像つかないし。

「今のお前はS級ヒーローには相応しくない、アマイマスクにもそう伝える必要があります
そうだ」

「好き勝手言ってくれますね。進化の家の場所は分かっているようですし1人で先に行つて頂いてもかまいませんよ。僕の見極めは済んだでしょう?」

「そうされてもらうでしょう」

とはいえカチンとくるのも事実なので思わず言い返したら、クロビカリは本当に僕を置いて行つてしまった。大きな溜息をついた僕にジエノスが問いかけてくる。

「戦力を分散させていいのか?」

「クロビカリさんが本当に無傷で進化の家を制圧できるのでしたら、構いませんから」

「その口ぶりから、そうなるとはお前も思っていないようだな」

「ええ。敵戦力は得体が知れませんか。かなりデンジャラスです」

そこで言葉を区切つた僕とジエノスは、先行したクロビカリに構わずペースを崩さず慎重に進んでいく。

「アア……!」

「クロビカリさんが危険みたいです……!」

進化の家に残り十数キロとなったところで、遠くからクロビカリの悲鳴が聞こえてきた。

すごく情けない声だった気がする。どうやら自慢の筋肉の鎧というものも、大したもののじゃないみたいだ。

……吹っ切れてから段々ツマキ師匠に僕の性格が似てきたかもしれない。

「急ぎましようか。高速で接近する反応があれば教えてください！」

「了解だ！」

ともかくクロビカリが危ない。僕とジェノスはある程度大胆に小走りで進化の家へ向かう。

ある程度進んだところで、ジェノスが声を上げた。

「来るぞ、複数だ！」

とうとう敵襲だ！

僕がバリアーを貼つたと同時に、ガキンとなにかが突き刺さる音がした。手裏剣が僕のバリアーに突き刺さっている！

「防御が間に合いましたね……！」

僕は慎重に進んでよかったと安堵した。この攻撃速度を見極めることは今の僕には

とても厳しい。やっぱり殺気に自動反応して超能力を発動できるように訓練する必要がありそうだと僕は再び感じていた。

「数は何人ですか!？」

「21人居て、俺たちの周りを高速で動き回っているようだ!」

僕は覚悟を決めた。超能力で動きを止めようとしたところで、忍者相手には無駄だろう。

閃光弾や催涙弾を放たれたりして、搦め手でバリアーを突破される可能性も十分ある。

「ジェノスさん、その場から動かないで下さい!」

忍者と戦うとなった時から僕には考えがあった。そもそも忍者相手に正攻法で真正面から戦う必要は全くない。

大規模な超能力による天災のような力の行使、それが僕の戦いのスタイルなのだから!

「頂点土石波!」

僕がバリアー越しに両手を伸ばしたけれど、忍者たちの近くでなにかが起こった様子はない。

忍者たちは不発か、と嘲るような笑いを浮かべて僕たちに襲い掛かろうとしたけれ

ど、その時には手遅れだった。もちろん彼らの命がだ。

忍者たちは確かに殺しのプロかもしれないけれど、人としてできる程度のことしかできない。

大規模の戦略的な災害めいた攻撃に対して、彼らは抗うすべを持たないんだ。

「なんだあれは……！」

忍者軍団の1人が暗くなった空を見上げて、恐怖におののく。

いくら数の有利があつたところで、避けようのない攻撃というものはある。

「高さ100メートルの土石の津波を他の山から持つてきました。この迫りくる波からは貴方たちは逃げられません！」

「戦いのスケールが何段階も違う……！」

僕はバリアーで身を守っている。ジェノスにも今はった。

クロビカリさんがどうなっているかは分からないけれど、この攻撃で死ぬとは考えられない、そして周囲の人は忍者が殺しているため他の人間に危害が加わる必要はない！
僕にはやりと忍者たちに微笑みかけた。

「僕たちは死にませんが貴方たちは無事ではすまないでしょう。僕が対応できない人数でいらつしやつた貴方たちが悪いんです！」

「狂っている……！」

「そう貴方たちが思うのなら、それは誉め言葉ですよ」

僕の笑みはどこか歪だったことだろう。そう、S級は人格も力も人を外れて狂っているものだ。

今までの戦いの経験から、僕はそれを既に学んでいる。

「バカな……こんなことで我ら忍天党が全滅するなど認められるか……!?!」

押し寄せる大災害に匹敵する脅威に忍者はどうにもできなかった。

僕も、ジェノスも、忍者たちも轟音とともに僕が巻き起こした土の波に飲み込まれていき、こうして忍天党は首領を残して壊滅する。

土石の波が木や草など全てをなぎ倒してから2分後。

僕とジェノスはバリアーに囲まれて埋まった地中から地上に飛び出していた。

まだ先程起こった惨劇が理解できないのか、啞然としているジェノスに僕は声をかける。

「ジェノスさん無事ですか？逃げた生体反応はありましたか？」

ジェノスは数秒ほどの間と共に、硬い声色で僕に返事を返した。

「……なかった。全員お前の攻撃に巻き込まれたと見ていいだろう」

「忍者を超能力で直接捕えることは困難でした。広範囲の攻撃で滅殺するしかなかったので助かりました」

「お前は、人に超能力を使うことに躊躇いがあると思っていたのだが」

「これしかありませんでしたので……クロビカリさんのところに急ぎましょう。巻き込まれていなければいいのですが」

「……そうか、分かった」

始めて人を殺したことになるけれど、こうしなければ僕は死んでいたし本当に仕方がなかった。割り切るしかないだろう、死ぬ訳にはいかないのだから。

さつき悲鳴をあげていたクロビカリさんにあまりこれ以上恨まれたくはないから、僕とジェノスは改めて土砂まみれの道なき道を進み始めた。

再度の襲撃は、ジェノスと僕が再び歩き出してすぐだった。

「……高速で動く生体反応！」

「また忍者ですか！」

僕が再びバリアーを張ったけれど、先程までより手応えが明らかに重い！

襲撃者は僕の防御を割れないと悟ったのか、一度僕と離れて停止する。

「え……!?!」

「硬えな……!」

敵の姿が停止して、全貌がはつきり分かったことで僕は驚きに目を見開いた。人よりも2周りほど大きなカブトムシ……!?!人間じゃない、怪人だ。怪人が忍者並みの速度で

動いてる！

「だがな、パワーアップした超阿修羅カブト様には誰もかなわねえんだよ！」

「超阿修羅カブト……!?!」

「おうとも、進化の家ナンバーだぜ！」

超阿修羅カブトと名乗った怪人の剛腕がうねりをあげる。進化の家産の最強の怪人。忍者に匹敵する速度を持ち、クロビカリの筋肉の鎧すら破壊する程に強化された純粹な力の暴力が進化の家に向かおうとする僕たちの絶対的な障壁となつて立ちはだかつた！

僕とジエノスと決意

進化の家が生み出した忍者に匹敵する速さとクロピカリの防御を打ち破る力を両立している怪人、超阿修羅カブト。カブトムシの姿を模したこの怪人はムカデ長老やマルゴリのような巨体じゃないけれど、僕にとっては脅威そのものでしかなかった。

理由は明白だ。超阿修羅カブトが殴るたびに、僕が張ったバリアーに僅かだけれどヒビが入ってきている！

「これはマズいですよ……！」

今まで僕が張ったバリアーの防御壁は誰にも破られることはなかったし、これからもそうだろうと無意識に安心していた。だけど超阿修羅カブトは元々力がある怪人だったみたいで、それに加えて忍天党の忍者に匹敵する速さを手に入れた結果スピードが乗ったまま剛腕を繰り出せる。得た速度がそのままこの怪人の力になっているんだ……！

「おらおら、守ってばっかりか!？」

「……ッ！」

超阿修羅カブトが拳を繰り出すごとに鼓膜が破れるような轟音が響き、僕のバリアー

のヒビは大きくなる。もちろんぼくの頭痛も酷くなっていた。

防御に徹さなければ守り切れないため、下手に反撃することもできない。

人間ほどに小さい怪人だし、大規模な超能力を使うとすることすらできない。

そもそも忍者軍団にやったのと同じ方法の土石波を起こしたところでこの怪人に効くかはかなり怪しい。

そしてバリアーを破られた時点で僕は死ぬ。もはや絶対絶命……！

どうにもしようがなく、顔色が真っ青で歯を食いしばっている僕とにやけ面の余裕の表情で、拳をバリアーに叩きつけ続ける超阿修羅カブト。

けれどここには僕と超阿修羅カブトだけでなく、ジェノスもいた。

「俺を忘れるとは余裕のようだな……エアーマシンガンブロー！」

超阿修羅カブトの体に、ジェノスの無数の拳が突き刺さっていく。

僕にはその速度が早すぎて、うつすらとした残像しか確認できなかった。

間違いない、ジェノスも忍者の高速戦闘を会得している！

たまらず吹き飛んでいく超阿修羅カブトに向けて、ジェノスはてのひらを向ける。

「フラッシュとの度重なる模擬戦で、俺は速度をそのまま力に変換できることに気付いた。

お前も忍者の技術を受け入れ進化しているようだが、強くなっているのはお前だけで

はない。圧倒的な破壊力と速度の両立。それが俺の答えだ。神速焼却砲！」

ジェノスのてのひらから放たれた焼却砲が、吹き飛んだ超阿修羅カブトの体を包み込んでいく。しかも神速焼却砲のエネルギーは止まらない……！

「はっ！」

僕は前方500メートルほどが消し飛んだのを嘔然としながら見ていた。

協力者のジェノスがこんなに強いとは思わなかった。間違いなく今のジェノスは災害レベル竜以上の立派な戦力だ。

「今の俺は速度に特化しているが、僅かに全身のパーツを少なくすることで焼却砲に火力を回すことができている。これで怪人の排除が迅速に行える」

淡々と呟くジェノスに僕はおぞ気すら感じた。忍者並みの速度でこんなレーザーをぶっぱなししてくるんだから、今の僕では勝てない可能性がある。流石に超阿修羅カブトも消し飛んだか……そう思っていた僕の考えはとてつもなく甘かったとすぐに思い知ることになった。

「なめてんじゃねー！」

神速焼却砲のオレンジの爆炎を掻き消すように、怒り狂った超阿修羅カブトが姿を現す。

その姿は胴体の筋肉が隆起して、茶色から光輝く金色に様変わりしていた。

「超阿修羅モードだ！こうなっちまった俺は誰にも止められねえ！目にみえるものを殺し尽くすまではなあ！」

「ホワット!?なんの冗談ですか!?!」

僕は流石に悲鳴をあげることしかできなかった。どうやら超阿修羅カブトはまだあれで本気ではなかったらしいんだから、当然だろう。

僕たちに突進してきた阿修羅カブトだったけれど、そこでジェノスがぶつぶつなりにやら呟いていた。

「新たな生体反応が2つ、高速で接近……この反応はフラッシュユ！」

僕はジェノスの反応から、この2つの反応が味方であることを察した。

死んでいるかなと思っていただけで、どうやら無事だったらしい。

「煙幕手裏剣！」

聞いたことのない男の声と共に、超阿修羅カブトの全身が紫の煙に包まれていく。

僕とジェノスは超阿修羅カブトが咳き込んでいる隙に近づいてきた2つの反応の元に駆け寄った。

あの特徴的な金色の髪はフラッシュユだし、ソニックも手配書の通りの風貌だ。

2人はなにやら言い争っているみたいだ。

「紫色の煙幕か、非力なお前らしい姑息な手段だ」

「あの強化形態ならば搦め手のほうが有効だと感じたまでだ。そもそも進化の家に敗北したのは貴様も同じだろう？」

「お前は獣王という雑魚に大苦戦してモグラに捕えられたと聞いた。超阿修羅カブトに敗北した俺と同じにするな」

友人の軽口の叩きあいという感じだ。どうやらソニックとフラッシュの2人はかなり仲がいいらしい。ソニックは接近した僕とジェノスに向かって気だるげに吐き捨ててきた。

「意図したものかは知らんがお前の超能力で抜け出すことができた。気に食わないヒーローと共闘するのは本意ではないが借りは返す。この俺に土をつけた以上進化の家にも復讐しなければ気がすまん」

「分かりました、ここは賞金首である貴方のことは忘れます。超阿修羅カブトをどうにかしなければいけませんからね」

勝手かもしれないけれど、超阿修羅カブト相手に少しでも戦力が欲しい僕はしぶしぶ許可した。

僕の起こした頂点土石波が進化の家を巻き込んで倒れ、結果的にフラッシュとソニックの拘束が外れたみたいだ。進化の家を作り出した科学者や忍者の首領はどうなったんだろう？

「……」

「……すみません」

ソニックと違ってフラツシユは僕を鋭い眼光で睨み付けていた。土石がずれていた場合もう少して死んでいたと言いたいのかもしれないからその件だろう。これに関しては巻き込みそうになった僕の不注意としか言いようがなく謝ることしかできなかつた。

一方でジェノスは僕の右側からそんなフラツシユに駆け寄って、どこか嬉しそうに声をかけている。

「フラツシユ、無事でなによりだ」

「ジェノスカ。わざわざ俺を助けにくるとは甘いやつだ」

「お前には蚊の怪人の件でも、模擬戦のデータ集めでも助けて貰ったからな」

「ずっと付きまといてきたくせに生意気な奴だ、少し速くなったな」

とても人間らしいサイボーグのジェノスに、少し表情を緩めてジェノスの技量を褒めるフラツシユ。

2人の口調は粗暴だけれど、この両者の関係もどうやら悪くなさそうさうだ。

ジェノスが僕たちを尾行してでも、フラツシユ救出についてきそうだったのも頷ける。

「とにかく、このカブトムシを仕留めるぞ」

フラッシュが刀を取り出し、もうもうと立ち上る紫色の煙を注視すると、金色の超阿修羅カブトが飛び出してきた！同時にフラッシュ、ソニック、ジェノスが攻撃を合わせて飛び掛かっていく。

「……………」

「……………」

恐らく激闘が巻き起こっているんだろうけれど、身体能力も反射神経も常人レベルの僕の目にはなにも見えない。

今まで僕は超阿修羅カブト相手に無力でしかなかった。クロビカリが僕に失望した通りになってしまっている。最強になるところかS級ヒーローとの格の違いを見せつけられているだけだし、民間人のジェノスに助けられる始末だ。とてもふがいない。

このままでいいのか？いいわけがない！

この戦いが終わってから訓練する、なんて甘いことは言っていられない。ぷりぷりプリズナーのようにこの場で進化してでも今ここで超高速戦闘に対応してみせる！そうじゃないと、頂点を目指す資格がない。僕は無力な僕自身を許せなくなる！

「いきます……………」

僕はあえてバリアーを張ることをやめて、自ら命を投げ捨てるように激闘の死地へと

飛び込んでいった。

僕と高速戦闘と決着

覚悟を決めて戦場のまっただ中に歩き出した僕の姿は他のヒーローからは亀のよう
に鈍く見えただろう。自分の目で追いきれない戦いに参加するんだから無謀にもほど
がある。けどまだ決着がついていないということは、超阿修羅カブトに通る攻撃の決
め手が無いということ。ジェノスの攻撃が通用していない時点でどのみち僕がどうに
かするしかない。

超阿修羅カブトの攻撃に対応するためには殺気に反応するだけじゃ足りない。カン
と反射神経、摩擦の僅かな音も重要になってくる。

五感を超えて超能力も含めた六感で対応してみせる！

音がひとときわ激しくなった地点で立ち止まって唾を飲み込んで棒立ちになっている
僕が、最初の一撃を超能力で防御できたのは死神の鎌を幻視したからだだった。無挙動で
張った10センチほどの四角形のバリアーが、超阿修羅カブトの攻撃からしつかり僕を
守ってくれている。

僕は内心ガッツポーズをした。一番厳しい最初の1撃をしのいだ。バリアーの面積
を狭くする変わりに、そも強度は増している。普通のバリアーなら砕かれていたであらう

う超阿修羅モードの剛腕を受け止めることができた。

金色に輝く超阿修羅カブトの姿は拳を突き出した姿勢で一瞬止まったけれど、舌打ちと共にまたブレて見えなくなる。僕が速度を見切れていないだろうから手数で圧倒する作戦みたいだ、だけど僕にとっては好都合。

2 撃目、3 撃目と同じく小さなバリアーで防いでいくにつれて、僕は次第に高速戦闘から身を守る術を学習していった。全く見えなかった超阿修羅カブトやフラッシュたちの姿がコマ送りのようにぶつ切りではあるけれど、少しずつ見えるようになってくる。

ぷりぷりプリズナーみたいに、戦いの窮地の中で適応できているんだ。

「これならなんとかなりますね……！」

1 つ分かったことがある。超阿修羅カブトは忍者に匹敵するスピードは持っているしそれはかなりの脅威だけれど、搦め手を使ってはこない。さっきのソニックの煙幕みたいになにをしてくるか分からない忍者よりは怖くない。あくまでも速さだけを得ていて技術をトレースする方法を知らないあたりが人工的に作られた怪人の限界なのかもしれない。

コマ送りになった戦闘の様子を見てみると、やっぱりフラッシュもジェノスもソニックも数の優位は取っているものの、超阿修羅カブトの剛腕を刀で受け流すのが精一杯み

たいだ。

この中で一番火力があるジェノスの攻撃でさえ、超阿修羅カブトは余裕の表情で装甲で跳ね返している。だけど、僕が注目したのはその装甲の硬さそのものだった。もし本当にカブトムシを模した怪人なら、背中内部の防御力はプリンのように脆いはず！

今の僕の必殺技は敵の動きを止める頂点動力死、バリアーの防御を鋭い刃に転ずる頂点防御刃。土砂の攻撃はきかないだろうからこの中の2つに限られてくるけれど、敵の攻撃が見えるようになった今なら似たような技で超阿修羅カブトを倒すことができる。

「しぶとい忍者どもは後だ！ てめえは俺の攻撃を防御しているようだが、まぐれだろー！」
しびれを切らしたのか超阿修羅カブトのまぶしい金色が、再度フラッシュユたちから離れて僕の方に向かう。僕はヘッドギア越しに目をカツと大きく見開いた。コマ送りになっている超阿修羅カブトの動きが、一瞬だけ滑らかなものに戻る。

「げぶっ……!?!」

高速で動いているからこそ、回避できない攻撃がある。僕が空中に力を込めると超阿修羅カブトの背中が『内側』から破壊された。振り上げた拳を振り下ろすこともできず、超阿修羅カブトの体は高速で地面に叩きつけられて、すりおろされた林檎のように赤い血を地面に残す。

超阿修羅カブトは必死に踏ん張って四肢に力を入れて立ち上がろうとするけれど、金

色の体は茶色に戻っていて、もうそれもできないみたいだった。

「なにが起こつたんだよ……!?!」

「背中の柔らかい装甲内部に、超能力の力の塊を置いただけです。高速で動いている分内部からバラバラになりましたね」

「たかが超能力者が俺のスピードを完全に見切ったのか……!」

超能力による内部破壊は普通のアニメやバトル漫画ではありえない。強すぎるし戦いが一瞬で終わってつまらないからだ。

「ただこれだけは現実だし僕が求めているのは最強であり、誰にも負けない圧倒的な力だ。むしろ一瞬で敵を倒せるのならこれほど強い力はないだろう。」

強力な怪人であっても内臓が脆いことには変わりない。

「僕を舐めていたようですが、僕はヒーローの頂点を目指しています。僕が覚悟を決める前に僕を倒すことに集中すべきでした」

超阿修羅カブトの脳が、超能力の塊に包まれる。僕が脳をいじるとジタバタしていた体は弛緩して、動作を停止した。

「なんとかかりましたね……!」

僕は汗をぬぐう。紙一重の戦いだった。僕が覚悟を決めてバリアーに頼るのをやめなければ打つ手がなく全員負けていただろう。

超阿修羅カブトの心音が完全になくなったのを確認して、フラツシユ達も殺気を解く。

「ふん、あの高速の戦いについてこれるとは思わなかった。防御をといて歩き始めた時は、わざわざ死ににきたのかと思つたぞ」

「あそこで適応できないようなら、死んでもいいと思つていましたから」

「無謀だがこの俺でさえ倒せなかった相手だ、悪くない判断だった」

「ありがとうございます！」

ぷりぷりプリズナーの時もそうだったけれど、S級ヒーローに認められるというのは自分が成長できている実感があつて悪い気分じゃない。

「周囲に生体反応はないようだ。フラツシユ、捕えられた後どうなった」

「解放されてから、状況を把握してなにやら俺とソニックのデータをとつていた首謀者のジーナスにはしっかりとどめをさした。治療されていた忍天党とやらの首領は万全ではなく逃げたようだな」

「そういえば、ソニックが消えましたね」

「お前がとどめをさした瞬間大きく表情を歪ませて、離れていった」

賞金首ではあるから、決着がいたら逃げるのはおかしくない。一応一時的には共闘した間柄だし改めて戦うのも抵抗があつたから、よかつたと思うべきだろう。

もちろん次に会った時には捕えるけれど、恨まれてないことを祈る。

それよりもここから忍天党の首領との連戦にならなかつたことに僕は安堵していた。ブラストの道筋は辿れなかつたけれど、ここからさらに戦うのは辛すぎる。

「とにかく決着はついた。俺の救助にきてくれたことには礼を言わなければならんな」
「世話になったから、借りを返したただけだ」

「ヒーローは同士です、気にする必要はありませんよ!」

戦闘態勢をといた僕たちの表情は少し緩んだ。僕はヒーローの頂点を目指しているけれど、ヒーローそのものは味方だし敵対するつもりはない。

「もう進化の家に用事はないですし、下山しましょう」

あたりはいまだに僕の土石波で荒廃しているし、凸凹の激しい地面を無理して登山する必要はない。

同じ考えなのだろう、フラッシュとジェノスは軽く頷いた。

視界の端で筋肉の鎧を砕かれて震えているクロビカリは、見なかつたことにしてあげた。僕に声をかけられても気まずいだろうし、立ち直つてくれることを祈ろう。

こうしてアマイマスクの任務を無事こなした僕は、課題をこなしついに数日後S級ヒーローになる。新たについた名前は『恐怖のギアスパー』。フブキやタツマキ師匠にちなんでいるのかもしれない。

とにかくここからが僕にとっての新たなスタート地点。最強を目指す僕の戦いはまだ続く。